

体育授業における子どもの課題発見を促す教科横断型授業の効果 —学習カードの統一による国語科と体育科の接続—

中島 寿宏¹, 木本 理可², 高瀬 淳也³

Effect of Cross-subject Learning to Prompt Children's Task-discovering in Physical Education Class —Connecting Japanese and Physical Education Classes by Unified Worksheets—

Toshihiro Nakajima¹, Rika Kimoto², Junya Takase³

Abstract

The purpose of this study was to verify the influence of cross-subject learning on exercise learning by using unified worksheets between Japanese language class and physical education class. We examined the effects of linguistic activities in Japanese language classes on the task-discovery in exercise learning. The participants were 8 elementary school children (4 boys and 4 girls) in a fifth and sixth grader class and their classroom teacher. First of all, children learned how to expand and spread their idea and express their thoughts on writing essay in Japanese language classes. Then, the children applied the method of finding various options and viewpoints in Japanese classes to the task-discovery activities in physical education classes by using same worksheets. As a result, even in physical education classes, children could noticed their good and weak points in their exercise each other based on learning contents of the Japanese language classes, and they could realize their own tasks on exercises. In this practical attempts, children became to have valuable discussions and efficient task-discovering learning based on the way of thinking from the essay writing. In conclusions, the cross-subject learning connection between Japanese language classes and physical education classes prompted children's task-discovering in their exercise.

Key words : Cross-subject Learning, Physical Education, Worksheet, Task-discovering, Problem-solving

1. はじめに

近年、言語はすべての教育活動の基盤であるという認識が広まり、言語活動が思考力・判断力・表現力などといった学力の重要な要素であることが認知されてきてい

る。1998年に告示された旧学習指導要領（文部科学省、1998）において、「総則」に位置付けられた「総合的な学習の時間」について、各教科の学習内容との関わりを検討して総合化を図る「知の総合化」という視点が不可欠とされ、教育課程に位置付けることが求められるよう

1. 藤女子大学
〒061-3204 北海道石狩市花川南4条5丁目7
2. 旭川工業高等専門学校
〒071-8142 北海道旭川市春光台2-2-1-6
3. 大谷大学
〒603-8143 京都市北区小山上総町

著者連絡先 中島 寿宏
nakajima@fujijoshi.ac.jp

1. Fuji Women's University
Hanakawa Minami 4jo-5, Ishikari-shi, Hokkaido
061-3204
2. National Institute of Technology, Asahikawa College
2-2-1-6 Shunko-dai Asahikawa-shi 071-8142
3. Otani University
Koyama-Kamifusacho, Kita-ku, Kyoto-shi, Kyoto
603-8143

になった。この改訂を機に、総合的な学習の時間において国語、社会、そして情報などの学習内容や知識を活かした実践についての報告が多くみられるようになる(川本, 2000; 林, 2003; 稲川・岡本, 2007; 片山, 2006)。

その後、2003年のOECD(経済協力開発機構)によるPISA調査(Program for International Student Assessment: 生徒の学習到達度調査)の結果において、日本の「読解力(Reading Literacy)」の得点がOECDの平均値程度まで低下していることが問題として指摘された(国立教育政策研究所, 2004)という背景もあり、2008年改訂の小学校学習指導要領(文部科学省, 2008)および中学校学習指導要領(文部科学省, 2008)においては、言語活動の重要性がさらに強調される形で明示されることとなった。この改訂では、教育活動全体を通じた言語活動の充実や各教科・科目等における学習の成果を深く関連づけた教科横断的な学習が推奨されるようになっていく。特に、「『総合的な学習の時間』のみならず、教科指導においても、「知の総合化」を図る多様なカリキュラム開発が課題となっている」(林, 2003, p.89)ことから、総合的な学習の時間だけではなく、全ての教科においてそれぞれの学習内容を相互に関連づけながら学習を進めることが重要であるとされた。佐藤(2011, p.9)が、「言葉の教育は学校教育全体の中軸の一つであり、これまでのように言葉の教育を国語という一教科の枠内に閉ざす教育は反省しなければならない」と述べているように、これからの学校教育においては言語活動が国語以外にも様々な場面で学習を支える要素となる。

2008年の学習指導要領の改訂後は、各教科・各分野における教科横断的な授業の開発を試みた実践が多くみられるようになり、学習内容の接続による学習効果への影響が報告されている(新田, 2008; 三又ほか, 2010; 橋元ほか, 2011; 松田ほか, 2011; 二五, 2013; 竹内, 2014; 欽本ら, 2014; 畑尻, 2016; 井原, 2016)。文部科学省(2011, online)は言語活動について、「国語科で培った能力を基本に、それぞれの目標を実現する手立てとして、(中略)言語活動を充実させる必要がある」と示しているように、言語活動を学習の基盤の一つとしていることから、近年では国語科との教科横断型授業についての実践が試みられるようになってきた(秋田ほか, 2014; 蛭谷・田中, 2015)。

言語活動の充実に関しては体育科教育においても不可欠となっており、文部科学省(2011)は体育授業における言語活動の指導事例集を示して、体育授業におけるコミュニケーションの促進や思考力向上を図っている。諸日布(2009, p.322)は体育授業における読解力の育成にかかわり、「体育授業でもPISA型『読解力』を育成する上で『学習カード・ノート』などの記入が有効な手段であることが示唆されている」と述べていることから、学習カードの活用による体育授業内での言語活動の充実がこれからの実践の中では求められると考える。体育授

業における学習カードについては、中村ほか(1995)による報告では、学習カードの内容の工夫によって、子どもが自主的に活動を行うための手立てとして有効となるだけでなく、技のイメージや動きをとらえやすくするのに効果があると示されている。小宮(2016)は、保健体育授業における学習カードの活用目的の一つに「生徒が自分の状況を明確に把握しながら、課題の解決を進めていくことができるようにする」としていることから、学習カードの活用による国語科と体育科が連携した教科横断型授業の実践が手立ての一つとして有効となると考えられる。

体育科と言語学習を連携させた教科横断型授業の実践報告や効果の検証を実施した例としては、高等学校における保健体育教諭と英語教諭が交互に授業をリードする形式でのチーム・ティーティングによる食生活・食文化に関わる授業(熊本県立高森高校, 2011)を実施することで生徒の学習意欲の喚起に結びつけた実践がある。また、大学の附属中学校における体育授業と国語の力との関わり(飯田, 2005)についての実践報告では、教師の言葉かけによる友好的雰囲気づくりや効果的な学習を進められるような言葉によるコミュニケーションの力が重要であるとしている。しかし、体育と国語の関わりについては、これら限られた実践報告があるのみであり、さらに、学習カードを活用した体育科と国語科の学習内容を結びつける教科横断型授業による言語活動の有効性について検証された例はみられない。

そこで本研究では、小学校において学習カードを活用した体育科と国語科の教科横断型授業を計画・実践し、国語科での言語活動と体育授業における運動学習を連携させることによる学習効果について検証することを目的とした。特に、今回は国語授業と体育授業で使用する学習カードについて、国語授業において論理的に文章を記述・作成するという学習内容で使用する学習カードを、体育授業においても近い形の様式に合わせることによって、体育授業の中での言語活動の促進による運動における課題発見につながるかについて授業実践から調査した。

2. 研究の方法

1) 対象校・対象児童

本研究は、北海道十勝振興局管内にあるK小学校の5年生(男子2名, 女子3名), 6年生(男子2名, 女子1名)の計8名の複式学級を対象とした。本実践における授業者は国語・体育のどちらも学級担任の教諭(男性, 小学校教員経験年数15年以上)であった。

今回の授業実践の内容と研究成果の発表方法については、対象となった小学校の校長の協力のもと、小学校において保護者説明会を開催し本人・保護者の同意を得た上で実施した。

2) 授業実施の期日

授業実践は2016年5月から6月にかけて実施した。まずは授業の効果を比較検証する目的のためのプレ授業として、国語授業との連携を意識していない学習カードを用いた体育授業（陸上運動）を2時間実施した。その後、教科横断型授業として、様式を近づけた学習カードを活用した国語授業（文章作成）を2時間、体育授業を2時間（鉄棒運動）実施した。

3) 授業の形態

本研究対象となった学級は高学年複式学級であり、学級担任が5・6年生の2つの学年児童を同時に指導する授業展開となる。全国へき地研究連盟（1998）は、複式学級においては、指導内容の組み合わせを考慮することや、指導方法の工夫をすることが必要であるとしている。そのため本研究では、国語授業については、学級を構成

している上学年と下学年の児童生徒に対して、学年ごとの教科書あるいは指導事項に沿った教材で指導する（全国へき地研究連盟，1998）ことを重視し、学年で授業目標と単元での到達目標を別々に設定する学年別指導の形態で行った。ただ、授業のテーマや授業展開については2学年で共通させることとした。また、体育授業についても、上・下学年に同時に同内容の学習を指導すること（全国へき地研究連盟，1998）を重視しながら、同単元を指導する中で、授業目標と単元での到達目標をそれぞれ設定しながら同じ授業展開の中で実施した。

4) 各授業の内容

(1) 国語授業の授業内容および題材

国語授業において、本対象となった学校では5・6年生ともに教育出版株式会社編集局（2011）「ひろがる言葉」を教科書として使用している。本実践の対象となっ

国語科指導案

1. 単元名 「発想を広げよう」

2. 本時の展開

(1) 本時の目標

- 話題に合わせて互いの知識や考えを出し合い、まとめることができる。(5・6年共通)
- 理由を挙げながら筋道立てて文を書くことができる。(6年生)
- 理由を挙げて文章をつくることができる。(5年生)

(2) 本時の展開

児童の活動	○教師の支援 ・ 評価
<p>1. 学習課題の把握</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>課題提示 「給食のおすすめを考えてまとめて文章に書く」</p> </div>	<p>○テーマに沿った要素を挙げ、その一つ一つに説明を加えるという学習課題を意識させる。</p>
<p>2. 学習カードに、「給食のおすすめ」とその理由を記入する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習カードにより、おすすめする要素を3~4つ程度挙げ、ひとつひとつに詳しい説明を記述する。 	<p>○実物投影機を使用して学習プリントへの記入の仕方を説明する。</p>
<p>3. 互いに書いた内容を交流する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出てきた意見で同じ内容をグルーピングさせる ・自分が書いたものと比較しながら、考えたことや伝えたいことの話題を決める。 ・周囲の意見と自分のアイデアを比べながら、それぞれの内容について確認する。 	<p>○短冊に給食のおすすめを書かせ、黒板に掲示させる</p> <p>○うまくアイデアがまとまらない児童に声をかけて教師と一緒に考えるように促す。</p>
<p>4. 自分の記入したものや交流で発表されたものをもとにして、「給食のおすすめ」について複数の要因から考えた作文を書く。</p>	<p>【評価】考えや意見を図にまとめたものをもとに、作文を書くことができる（書く）（観察、作文）</p>
<p>5. 一人ずつ自分の考えた給食のおすすめについて学習カードの記述内容を発表する。</p>	
<p>6. 授業の感想をノートに書く。</p>	

図1 国語科学習指導案（発想を広げる）

た授業は、6年生は「発想を広げよう（課題を見つける）」という単元（全2回）、5年生は「『情報ノート』を作ろう」という単元（全2回）であった。6年生については、上記の教科書内にある「考えや意見をノートにまとめよう」の学習内容について、5年生については教科書内にある単元名と同様の「『情報ノート』を作ろう」という学習内容について、本実践にあたって作成した学習カードを使用して進めていくものであった。国語の1回目授業では、「給食のおすすめを考えて文章を書こう」という課題を元に、発想の広がりや多様な視点を引き出す学習内容であった。図1に簡略化した学習指導案を示した。第2回授業では、前回の学習内容を踏まえ、「自分の学校をアピールしよう」という課題を元に、所属する小学校の良さ、楽しさ、面白さなどについて、多様な面から外部の人々に対してアピールするための文章を作成するという学習内容であった。本単元においては、「発想を広げる」ということが主たる単元目標であり、「給食のおすすめ」「学校のアピール」というテーマに対して、様々な視点から物事を捉えられるように授業を構成した。学習カードへの記述時間はおよそ15分間であった。

(2) 体育授業の授業内容および題材

体育授業では、本実践に先行して行われた全2回の「陸上運動」の単元において、第1回目に「短距離走のスタート動作」、第2回目に「短距離中間疾走」を実施した。「短距離走のスタート動作」の授業では、前傾姿勢を維持したスタート技能の習得を課題とし、「短距離中間疾走」の授業では肩の力を抜いてリラックスした状態で腕を大きく振る走動作の習得を課題としている。また、この2回の授業では、スタート時は視線を下にすること、中間疾走時では視線を前に移動させることについても学習課題の一つとしている。この2回の授業では、児童たちは通常の授業での学習カード（動作について自分の気づいたこと、自分がとらえた課題、授業の振り返りなどを記入する形式）に記述を行なった。第1回目授業についての簡略化した学習指導案を図2に示した。児童たちの学習カードへの記述時間はおよそ8分間であった。

その後、教科横断型授業として実施した国語授業を経て、学習カードの様式を近い形に合わせて実施した体育授業では、対象となった単元が「鉄棒運動」である。「鉄棒運動」では、全2回の単元計画で実施された。図3に、「鉄棒運動」の簡略化した学習指導案を示した。「鉄棒運動」では、「両膝かけ振動下り」の動きについての実践であり、鉄棒に両膝をかけて上下逆の状態から大きく身体を前後に振動させ、振動が切り変わるところで膝を鉄棒からタイミングよく外して両足で地面に降りる動作についての学習であった。「鉄棒運動」の授業では、国語で使用したものと形式が近い学習カードを使用した。国語と体育での学習カードについては、縦書きと横書きであること以外はほぼ同形式とした。学習カードへの記述時間は、「陸上運動」の授業と同様に約8分であった。先

行して実施した「陸上運動」と、教科横断型授業として実施した「鉄棒運動」の授業では、図2と図3で示したように、授業の流れ、課題提示、教師のかかわりに大きな差異は設定せず、児童たちは運動の中から自らの課題を発見し解決に繋げていくという展開としている。

5) 授業の評価と分析の方法

(1) 学習カードの評価

体育授業研究の一つである事例研究では、小林（1995）による手法として、授業で使われる学習カードや体育学習ノートなどから得られる質的データを利用し、「そこに生じる事象の教育的な意味を解釈」（小林，1995，p.85）することで授業成果を評価するものがある。本実践では授業の有効性を検討するために、児童の学習カード上の記述内容や語彙などの質的データと、学習カード上の記述量などについて分析することとした。特に、体育授業では通常の学習カードを使用した授業と、教科横断型授業での学習カードとの記述の状況の変化を分析した。

(2) 授業者との授業カンファレンス

各授業後には、授業者と筆者とが授業カンファレンスとして、授業での全児童の様子、指導方法についての振り返り、授業の進行状況の確認、全児童の記述内容の変化などについて協議を実施した^{注1)}。授業カンファレンスはそれぞれ15分程度で実施し、授業者から挙げられた指摘についてはその後の授業改善のためのフィードバックとして活用されている。

3. 結果と考察

1) 「陸上運動」における授業内容と学習カードの記述

先行して実施した全2回の「陸上運動」授業で使用した学習カードを図4に示した。また、表1には陸上運動で使用した学習カードへの8名全員の記述内容と記述した文字数を示した。児童たちはスタートと中間疾走の動作について、いかに効率的にできるか話し合い活動を交えながら課題を見つけ、練習につなげていくことが単元・授業の主な課題となっていた。表1に示した児童たちの学習カードの内容には、スタート動作については「少し前傾」、「下を向く」、中間疾走の動作については「(肩)の力を抜く」、「(目線は)前」と記述している。しかし、これらのポイントについてはフォームに関する本質的なポイントではあるが、授業者が授業中に口頭で指摘した事柄とほぼ同様であり、児童たち自身がそれぞれの動作や課題について考えて記述したかどうかは疑問である。また、教師が指摘した内容以外の視点や気づきについてはほとんど確認することができない。「身近な課題」、「今日の感想」といった自由記述の欄については、全体として記述量が少なく、「少し前傾で走ると走りやすくなった」、「けりがつよい。前けいしせい。回転が早い」など、使用語彙についても乏しい結果となっていた。これらの

体育科指導案

1. 単元名 「陸上運動（短距離走）」
2. 本時の展開
 - (1) 本時の目標
 - 体を前に傾け、低い姿勢ですばやく走り出すことができる。（6年生）
 - 体を前に傾け、低い姿勢から走り出すことができる。（5年生）
 - (2) 本時の展開

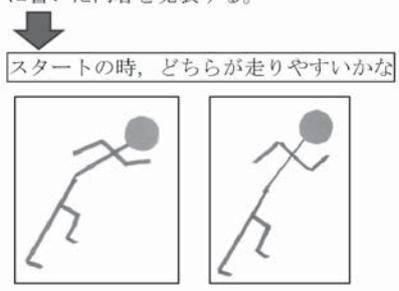
児童の活動	○教師の支援 ・評価
1. 準備活動 準備運動～縄跳び、逆立ち、ダッシュ 場の設定（短距離走におけるスタート位置）	○前時とのつながりを確認させる。
2. 学習課題の把握 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 課題提示 スタートダッシュのコツをみつける </div>	○スタート動作についてのイラストを提示したり、授業者が演示したりしながら、特に上体の傾きに注目して話し合いができるようにする。
3. 友達の動きを観察して、学習カードに良いところを記入する。 ・ダッシュする児童と観察する児童に分かれる。 ・相手の動作についてうまくできている要素を見つける。	○友達の様子について観察できない・考えが出せない児童については、教師がアドバイスをを行いながら、動作確認での視点を持たせる。
4. 互いに書いた内容を発表する。 <div style="text-align: center;">  </div>	○スタート時の重心位置に意識が向くように促す。
5. 実際に試してみる。 <div style="text-align: center;"> </div>	【評価】上体をやや前傾させながら走り出すことができている。(技能) <観察>
6. わかったことを学習カードにまとめる。 7. 最後にスタート動作についての確認練習を行う。 8. 整理活動 ストレッチ、片付け	

図2 体育科学習指導案（陸上運動）

ことから、本授業での学習カードの記載内容が児童それぞれの考えや気づきに基づいたものというよりも、授業内で教師が指摘した内容を書き留めている部分が多かったと考えられる。授業者との授業カンファレンス時においても、授業者は「教師が誘導しなければならない授業であった。子どもたちから意見を出して欲しかったが、あまり出てこなかったために、こちらで課題やポイントを指示する場面が多かったことが反省点として挙げられる」、「学習カードについては、自由記述欄の空白が目立っていたことから、もう少し子ども自身の意見を引き出す

工夫ができたかもしれないと感じている」というように授業を振り返っていた。森（2012, p.12）は体育科における言語活動の充実の懸念として、過去の実践を振り返りながら、言語活動を授業に取り入れることが目的となってしまう体育授業として運動技能を向上させる学習として機能しない「言語活動の単なる形式的導入になっていると考えられるものがあつた」と指摘している。また、山口（2014, p.17）は、体育授業での話し合い活動の問題点として、「実際、児童同士での話し合いの場面が設定されていても、『何を話し合うのか』を児童が理

体育科指導案

1. 単元名 「鉄棒運動」

2. 本時の展開

(1) 本時の目標

○自己の課題を見つけて練習に取り組み、振りの大きな両膝かけ振動下りができる。(6年生)

○自己の課題を考えながら練習に取り組み、両膝かけ振動下りができる。(5年生)

(2) 本時の展開

児童の活動	○教師の支援 ・評価
<p>1. 準備活動 準備運動～縄跳び、逆立ち、ダッシュ 場の設定</p> <p>2. 学習課題の把握</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>課題提示 振りの大きな両膝かけ振り下りができるようになる (6年生) 両膝かけ振り下りができるようになる (5年生)</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の動作についての課題について、様々な視点から考えることで、技の完成度の向上につなげる。 ・技を構成する要素について、学習カードに沿って自分の課題を考えながら、練習に取り組む。 <p>3. 友達の動きを観察して、良いところを記入する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人ずつ両膝かけ振動下りを行い、他の児童は観察しカードに記入する。 <p>4. 互いに書いた内容を発表し、運動のコツを見つける。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin: 5px 0;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 5px;">腕を大きく振る</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 5px;">振動に合わせて頭も振る</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 5px;">背中を伸ばしたり丸めたりする</div> </div> <p>5. 自己の課題をみつけ、練習に取り組む。</p> <p>6. 逆上がりから支持回転技、下り技への連続技の構成を考え、練習する</p> <p>7. 本時で両膝かけ振り下りの要素について、わかったことを学習カードにまとめる</p> <p>8. 整理活動 ストレッチ、片付け</p>	<p>○前時とのつながりを確認させる。</p> <p>○国語の時間で使用した学習カードと様式に近いものを配布する。その際に国語の授業内容を振り返らせ、本時の授業に応用するように促す。</p> <p>○友達の動きについて観察できない・考えが出せない児童については、教師がアドバイスをしながら、動作確認での視点を持たせる。</p> <p>○発表された意見をまとめ、運動のコツとして板書していく。</p> <p>【評価】体を大きく前後に振動させた両膝かけ下りができる(技能) <観察></p>

図3 体育科学習指導案(鉄棒運動)

解していない、それに対して教師による積極的、具体的な手立てが施されないまま授業が進められているといった授業を見ることがあります」と述べている。つまり、体育授業に単なる話し合いの時間を設定するだけでは、体育・運動学習としての効果が期待できるものとはならない。いかに学習効果と結びつくように言語活動を促す工夫がされているか、言語活動の内容が授業課題と関連づいているかが重要である。今回の「陸上運動」の授業では、話し合いの時間や学習カードへの記述が、いわゆ

る「単なる形式的導入」となっており、児童たちの課題発見などにつながっていなかったと考えられる。

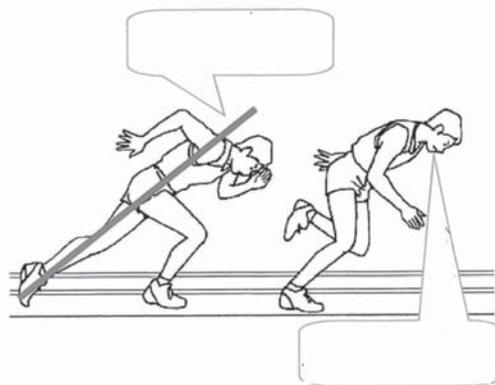
2) 国語授業における「課題発見」の学習

国語科では、第1回目の授業において、「給食のおすすめ」を考え、文章で表現するという課題であった。本実践では、給食の内容などについてのおすすめするポイントについて4つの視点から考えて記述するというものであり、授業者から課題や文章のまとめ方について説明

課題を見つけよう

名前 _____

◎身近な課題「スタートダッシュ」



今日の感想

図4 「陸上運動」で使用した学習カード

表1 「陸上運動」における学習カードの記述内容

児童	項目	国語授業前での「陸上運動」での記述内容①	国語授業前での「陸上運動」での記述内容②	平均語数
A	課題に対して	・うで大きくふる。足を前に。あごを引く。手→前に。手→ひじまげる。つま先。しずむ。	・足を前に置く。足のすばやい回転。ピッチ。	49.0
	授業後の感想	・少し前傾で走ると走りやすかった。	・肩の力を入れて走っても肩にしか力は入らない。	
B	課題に対して	・けりが強い。 ・前けいしせい。 ・回転が早い。	・体まっすぐ。 ・うでをよくふる。	40.5
	授業後の感想	・おもいきり前かがみにすると速くなった。	・手は力をぬいて走る。目線は前をむく。肩は力をぬいて走る。	
C	課題に対して	・手をふる。 ・すこし大また。 ・うでをまげる。 ・前をむく。少し。	・うでを大きくふる。 ・すこし大また。	45.0
	授業後の感想	・まっすぐたおれるようにやってみたらすこしはやくなった。	・いろいろ直すところがあったのでなおしたい。	
D	課題に対して	・手や足を速く動かす。 ・前に少したおれて走る。	・前けいしせいから元にもどす。	34.0
	授業後の感想	・下を向くと少し前傾になり、速く走れた。	・力をぬくと、うでがふりやすくなった。	
E	課題に対して	・だんだん上半身をあげていく。 ・さいしょは小また。 ・前けいしせい。	・大またで走る。 ・うでを大きく早くふる。 ・むねをはる。 ・下ではなく前を見る。	56.0
	授業後の感想	・前傾姿勢だとダッシュのスピードが早くなった。	・中間疾走のやり方がわかった。手のにぎり方もわかった。	
F	課題に対して	・スタートの構えの時に少ししずむ。 ・最初は小またで、後から大また。 ・最初は前けいしせい。後からまっすぐ縦。	・スタートより大また。 ・スタートより姿勢がたて。 ・スタートより前を向いている。	93.0
	授業後の感想	・始めの時より、スタートの時前けいしせいになった。少しまげてスタートするよりやりやすかった。	・肩に力を入れると、つかれて自分の走りができなかった。だから肩の力をぬいて自分の走りをできるようにすると良かった。	
G	課題に対して	・最初はまえの方にたおれているけど、少しはしたらまっすぐ前に向いているうでを大きくふっている。 ・スタートの時少ししずむ。	・しせいをまっすぐにしてはしる。	66.0
	授業後の感想	・スタートする時少し前傾になってやりやすかった。	・肩の力をぬいてはしたら、うでも大きくふれて、大またで楽に走ることができた。	
H	課題に対して	・最初はしせいを低くしてだんだん高くして行く。つま先で速くける。足の回転をはやくする。上はんしんをぶれないように走る。	・ダッシュの時はしせいを低くして高く。 ・30m過ぎたらつま先で走る。 ・30m過ぎたら大またで走る。	85.0
	授業後の感想	・前傾でやると風のていこうを防げる。走りやすい。でもつかれた。	・かたを入れて走るとやりづらい。つかれる。力をぬくと走りやすくなりはやくなる。	

があった上で、作文に取り組むという授業内容であった。本実践で使用した学習カードを図5に示した。児童たちは、「おいしい」、「全校のみんなで食べる」、「給食だよりが楽しい」、「おかわり」、「デザート」など、自身の発想を元にしておすすめのポイントを挙げて説明文を書いている。また、授業後半では自分の挙げたそれぞれのポイントについて、作文としてまとめている。

第2回目の授業課題は、「自分の小学校をもっとよくするためには」というテーマに沿って、前回の授業と同様に4つの視点から考察し文章として表現することである。児童たちは、第1回目の授業で学習した内容を踏まえて課題に取り組んでおり、第2回目の授業ではさらに記述量が増しているカードも多くあった。また、それぞれの児童の着目点が児童会活動、飼っている羊、あいさつ、給食、友達関係、遊び、遊具、授業など多種多様であり、考えの独創性や独自性が授業の中で現れていた。

今回の学習カードを用いた国語授業では、テーマを捉える視点を4つとしていることで、児童たちはまずは自分の考えを整理することができ、次の段階でそれらの視点を文章に表現することができるようになってきている様子が見られた。全体として記述量も多く、指定されたスペースでは書ききれずに別シートを使用するほど長い作文となっている児童が半数以上いた。授業者との授業カンファレンスでは、「ただ『作文を書きなさい』という課題だと、なかなか文章が作れなかったり考えが広がらなかったりする児童が多い。しかし、今回の授業のように、まずは自分のアイデアや視点を出す作業から入ると、うまく考えがまとまり、結果として記述量や内容の向上があった」という振り返りを行っていた。

これらのことから、今回の全2回に渡る国語授業の目

標である、「発想の広がり」が授業成果として達成されている様子が確認できたと言える。

3) 教科横断型体育授業における「課題発見」と学習カードの記述

国語授業の学習を踏まえた上で、教科横断型体育授業として「鉄棒運動」の単元・授業を実施した。「鉄棒運動」の授業では、児童たちはそれぞれの運動について相互に良いところの指摘や課題・改善点の明確化について意見を出し合いながら練習に取り組むという、「陸上運動」の授業とほぼ同様の授業展開であった。また、教師のかかわり方についても、「陸上運動」の授業との差が無いように配慮して授業を実施している。本実践では、国語授業で使用した学習カードと様式を近くさせることで、国語授業での学習過程を「鉄棒運動」でも応用させることが意図であった。使用した学習カードは図6に示した。また、表2には授業後に8名全員が学習カードに記述した内容と記述文字数を示した。

「鉄棒運動」の授業では、国語授業と同様に運動の視点を4つとしていることで、児童自身が自分の動作のポイントについて整理・焦点化するような様子が見られた。先行して実施した「陸上運動」の授業では、授業者が指摘した内容や動作のポイントについて確認する活動が多かったが、「鉄棒運動」では児童それぞれが自分の動作について考え課題を探す様子が多く見られた。「鉄棒運動」で使用した学習カードには「うでをふる」、「おりるときに手を前に出す」、「ふっきんを使う」、「いきおいをつける」、「胸をはる」、「おりるときに重心を中心へ」、「こしを動かす」といった児童独自の意見やポイントの指摘がみられるようになっていた。特に、指摘した各ポイン

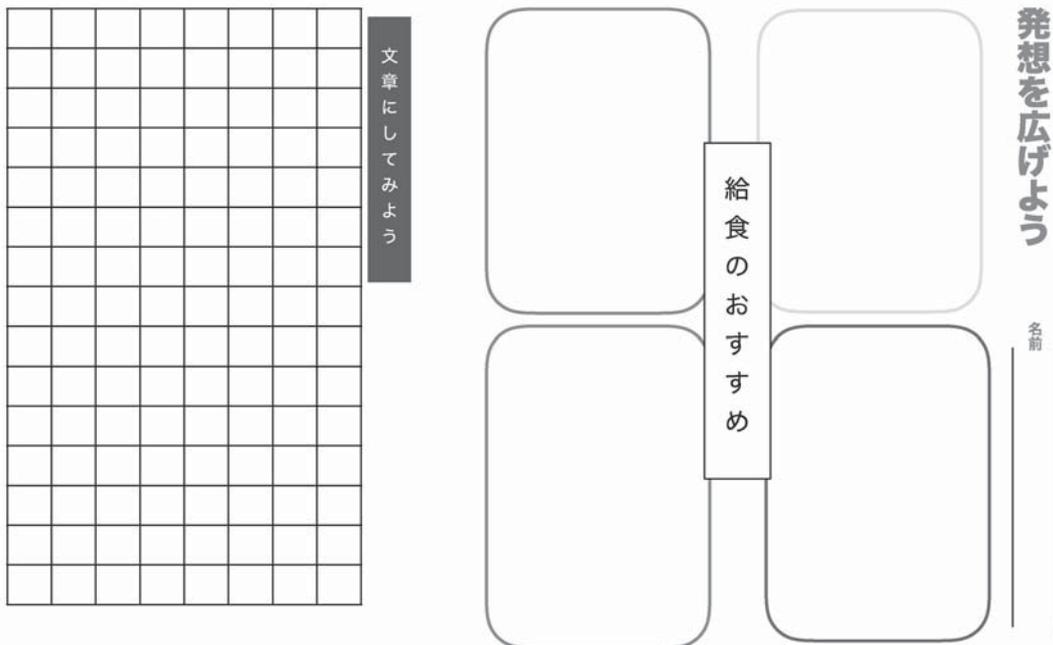


図5 国語授業で使用した学習カード

課題を見つけよう

名前 _____

技のポイント



今日の感想

図6 「鉄棒運動」で使用した学習カード

トについてさらに詳細に説明を加えており、先行して実施した「陸上運動」での学習カードと比較して課題に対する意識の変化がみられる。学習カード上の全体の記述量も、ほぼ全ての児童が「陸上運動」の時よりも「ボール運動」と「鉄棒運動」において増えており、課題を発見したり改善点を探ったりすることに対して、意識が高まっている様子がうかがえた。記述文字数については、表1に示した「陸上運動」の学習カードと比較して、すべての児童が「鉄棒運動」では学習カード上の記述文字数が多くなっていた。

授業カンファレンスでは、授業者は「普段の体育授業ではあまり自分の意見や考えを表現・発言しない児童たちも、国語授業で学んだ順序で考えをまとめることで、クラスメートや自分自身の課題を探ることができていたように感じる。特に、学習カードで考えがまとまることで、運動課題に対して具体的なイメージを持つことができ、前向きに運動に取り組んでいたように思う」という振り返りをしていった。

工藤（2015）は体育授業における学習カード使用について検討し、体育授業の中で子どもたちが考えながら技能を習得していくための教材としての学習カードの有効性を示唆している。しかし、今回の「陸上運動」の実践のように、学習カードを使用していても子どもの課題意識に結びつかずに授業者が意図した結果とはならないことがある。小宮（2016, p.1）は学習カードの活用目的のひとつには、『「めあての設定」→「めあて実現のための工夫した活動」→「実現状況の確認」→「次時のめあ

ての設定』というサイクルで、生徒が自分の状況を明確に把握しながら、課題の解決を進めていくことができるようにする」という、PDCAサイクルにつながるメリットを挙げている。本実践においては、「陸上運動」の授業では児童は授業者の提示する課題に受動的な姿勢であるのに対し、「鉄棒運動」では国語科での学習内容と統一学習カードにより、それぞれの課題について主体的に考察することで、児童自身のPDCAサイクルが構築されたのではないかと推察される。授業者が授業カンファレンスにおいて述べていた「陸上運動」と「鉄棒運動」の授業での児童の様子の違いは、国語授業の文章作成についての学習経験と課題把握の過程の学習カードによる共通化が、児童自身による運動課題把握への効果として鉄棒運動の授業で現れた結果と考えられる。また、日景ほか（2004）は、使用目的や授業課題を焦点化した学習カード・ノートが子どもたちの課題を意識した運動への取り組みを引き出す効果があるとしている。今回の鉄棒運動の授業では、国語授業の学習内容を応用させることができる学習カードであったことが鉄棒運動においても課題の焦点化を促したものと考えられる。そして、児童の鉄棒運動での課題を捉える意識を引き出す効果につながることで学習カードへの記述量にも影響したと推察できる。

高橋（2011, p.14）が「運動やスポーツを対象に、身体活動を中心にして行われる体育学習においても、思考・判断し表現する言語活動が重要な役割を果たしている」と指摘しているように、学習者は思考・判断し表現する

表2 「鉄棒運動」における学習カードの記述内容

児童	項目	国語授業後の「鉄棒運動」での記述内容①	「鉄棒運動」での記述内容①	平均語数
A	課題に対して	<ul style="list-style-type: none"> ・「こし」：こしは鉄ぼうにちかづける。じょそうをほどほどに前にやっていた！鉄ぼうにまく。 ・「じょそう」：おもいきりける。むねをちかづける。 ・「足」：自分がいった方にやるように。 ・「うで」：うでのちからで体を鉄ぼうにもっていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「手を大きくふる」：手を大きくふると、顔も前に向く。 ・「リズムをあわす」：リズムがあわなきゃいきおいがつかない。バラバラ。 ・「前のとき顔も前」：前の時、顔も前にするとリズムがとれる。 ・「前の時体をそる」：前の時体をそって、後ろの時体をまるめるといきおいがつく。そりすぎ注意。まるめすぎ注意。 	145.5
	授業後の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと体を近くするときか上がりができるかくりつが高い。おもいきりじょそうをつけてけた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・うでを大きくふると、いきおいがたくさんつく。下半身もふる。 	
B	課題に対して	<ul style="list-style-type: none"> ・「てつぼうの近く」：てつぼうの近くに体をちかくする。 ・体を近くによせる。思いきってやった。 ・「強く」：強く板をける。体をてつぼうの近くによせる。 ・「かんべき」：うでを近くしていた。かんべき。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「手を大きく」：手をおおきくふるとふればがが大きくなる。 ・「前と後ろに」：前と後ろに体を大きくふる。 ・「こしを動かす」：こしを動かすと大きくふれて、ちやく地も上手にできる。 ・「体の動き」：体の動きを速くすると上手にできる。 	128.5
	授業後の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・最初はてつぼうの近くにおなかを力を入れて体を近づけてできたし、高いところでもできそうだった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・うでを大きくふってみると体のふりがおおきくできた。手を前や後ろに大きくふった。 	
C	課題に対して	<ul style="list-style-type: none"> ・「いいこと」：いきおいがあった。(○○ちゃん) ・「いいこと」：はやかった。(○○くん) ・「いいこと」：ふみきるときのはやさがはやかった。(○○くん) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「手をふる」：じょそうをつけるために手をふる。 ・「ふりこの動き」：ふりこの動きでスピードをつける！ゆらす。 ・「足を前に」：足をまえにつきだしてちやくちする。 ・「体をふる」：せんしんをふる。 	88.0
	授業後の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・音をならすようにあしをけることが少しくなってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・まえよりも足を前に出せたので手や体もきをつけたい。 	
D	課題に対して	<ul style="list-style-type: none"> ・「いきおい」：いきおいが強くてきれいに回った。 ・「ける」：板をのぼるじゃなくける。 ・「ひく」：体をもっと鉄ぼうにひく。 ・「かんべき」：(○○くん) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「体をよくふる」：とくに、うでを大きくふる。 ・「前をむく」：着地する時は、特に前をむく。 	78.5
	授業後の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・上半身をぐとひきつけると体が上に上がった。次はうでも強く引く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体がよくなった時足をはなすと前につきだす(足)をすると前よりうまく着地できた。 	
E	課題に対して	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分のほうに足」：地面をけて足を上げる時上じゃなくて上から手前にする。 ・「ひじをまげる」：じょそうはよかったけど体がてつぼうからはなれていたからひじをまげる。 ・「力がつよい」：うでのちからでもやってるからじょそうがいらない。わかった。 ・「ひきつけた」：しっかりからだをてつぼうにひきつけていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「うでをふる」：うでを大きくふるといきおいがつく。 ・「体をそる」：体をそるとうでを大きくふれる。 ・「下りる時もそる」：振り下りる時は大きく体をそって足をのばせば足がはなれる。 ・「おりるとき手を前」：おりるときに手を前に出すとおりやすい。 	159.0
	授業後の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・前にできなかった所が出来るようになった。次に高いところではあとすこしだった。ひきつけれるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・うでを大きくふるとすごいきおいがついて足をつきだすと着地にしっばいした。 	
F	課題に対して	<ul style="list-style-type: none"> ・「鉄棒に体を近づける」：けた後、体を鉄棒にくっつけながらやる。 ・「強くける」：もっと強くけて足を上げるともっとやりやすくなると思う。 ・「踏み台を強く一気にかける」：ふみ台の高いところを1回けて、そのまま足を上に上げて、やる。 ・「足を手前もってくる」：もう少し足を上にあげた時に足を手前に引いて回る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ふっきんを使う」：自分のふっきんを使う。上半身を曲げてくの字にする。そうするといきおいがついて、よくふれる。 ・「腕をふる」：体を曲げる時は腕を曲げて、体を伸ばす時は腕をいっきにのばす。そうすると、いきおいがつく。 ・「足はなすタイミング」：3回目ふった時に、体が横になると足をなす。そうすると、空中にういてうまく着地できる。 ・「いきおいをつける」：最初足を鉄棒にかけて、やる時にふっきんをつかって上に行ってから始めるといきおいがつく。 	215.0
	授業後の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・ひざを曲げるとやりやすくなった。けた後、上がりやすくなり、回りやすくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・最初に体を鉄棒をつけることによって、いきおいがついた。いつもよりいきおいがついた。腕を意識すると前よりいきおいがついて、うまくとべてできた。 	
G	課題に対して	<ul style="list-style-type: none"> ・「鉄棒とのきより」：鉄棒とおなかをはなれていなかったからそこをもっとできるようにしたらいいと思う。はなれている人はきよりをちぢめたらいいと思う。 ・「ける」：じょそうをしたあと、板をけるようにしたほうがいいと思う。 ・「鉄棒とうでのきより」：鉄棒とうでがはなれているから、そこをなおしたらいいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「うでのふり肩」：うでを大きくふってまるを書くようにふる。 ・「体をふる」：体をふる時は、まげたりそったりしてふる。体も大きくふる。 ・「いきおいをつける」：ふる前にいきおいをつける。(マットをおしたり、体をこうぼうに近づける) 	168.5
	授業後の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・けた足を自分の立っていた方にむけるとやりやすかった。高い鉄棒でやるときは、うでを引いて、まわるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・着地する時、体がまっすぐになったときにしたら着地ができた。スタートのとき、いきおいをつけたら、いつもよりおおきくふれたと思う。 	
H	課題に対して	<ul style="list-style-type: none"> ・「鉄棒とのきより」：鉄棒とお中のきよりがはなれていて、もっと近づける。 ・「強く足をける」：足を弱くけると起きる時お中がはなれるから強くける。 ・「タイミング」：自分でリズムを作ってやると上がりやすくなる。 ・「足をまげてすばやく鉄棒へ」：足をのばしたままどと上がりやすくなるのですぐ足をまげる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「うで全体をうまく使う」：足と体だけではうまく上下できないので体全体やうで足を全部つかう。 ・「むねをはって体をそる」：いつもの体だと手がふりづらくなるとおもうのでむねをはって体をそる。いきおいがつく。 ・「下りる時重心を中心へ」：下りる時、前や後ろに行くと前にたおれたり下にたおれたりするから。 ・「いきおいをつけて下りる」：いきおいをつけて下りると「パタリ」と下りれるけど、いきおいがないと「パタッ」といたそうな音がするからいきおいは大事。 	254.5
	授業後の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・足を自分の方に向けてとじょそうがついてそのスピードで上される。鉄棒にお中を近づけるようにお中とひじ、手に力を入れてやるともっと鉄棒を近づけれる。やる前に自分のタイミングでやると上がりやすくなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スタートの前いきおいがつくと足がいたかったけど少しいきおいがついた。体をそると下と前といきおいがどれくらいかわかる。空中になる時は、垂直ではなく少しの字で空中になってちやくちする。 	

言語活動により様々なスキルを身につけることに繋がると考えられる。岡出（1994）は、学習カードなどを使用した言語活動を通して、体育授業の中で子どもたちが「わかる」ということにより、技術習得・人間関係構築・主体性形成・学力保障等に繋がると指摘していることから、体育授業における言語活動の充実が様々なスキルを習得するうえで重要となる。本実践においては、国語の授業で学習カードを使用しながら文章表現の方法を学び、体育授業でも国語と様式の近い学習カードを使用することで、学習者の考えをまとめやすい形式として応用することができ、教科横断型授業として体育における言語活動の充実にも効果的な授業実践事例であったと評価する。

4. まとめ

本研究では、小学校における教科横断型学習として、国語科で実施した「発想を広げる」という授業を、体育科の授業の中で国語授業と近い様式の学習カードを使用することにより、運動学習における課題発見に内容を接続させることで、体育授業での学習効果に影響を及ぼすかについて実践的検討を行った。その結果として、体育授業の中でも児童たちは国語の学習内容を踏まえた取組を実現することができており、体育における学習の中で様々な意見や視点から、児童それぞれが主体的に自身の課題を見つけることにつながっていた。このように、言語活動や言葉の学習は国語科以外の教科でも応用・導入することが可能であり、それぞれの教科での学習でも広げるメリットと必要性があると言えるだろう。

本研究では、授業における発話記録などは調査の対象とはしていなかったが、動画や音声記録と合わせた検証を実施することでさらに明らかになる部分があると考えられる。また、本実践は学級の児童全員についての効果を検証するために小規模学級での実践を対象としたが、普通規模学級でも同様の効果がみられるかについても検証していくことが必要となるだろう。さらに、今回は国語の学習内容を体育授業に接続させる取組であったが、反対に体育の学習内容を国語に接続させることについても検証していく価値があると考えられる。

注

注1) 各授業ではビデオカメラによる動画撮影を実施し、授業後に児童の様子や授業の流れについて確認を行った。全児童の映像や音声の記録が難しいため、映像を元にした授業成果の評価は行わないが、授業者との授業カンファレンスにおいて全体の流れの確認のために映像を使用した。

謝 辞

本調査の実施のご協力いただきました小学校の教職員の皆様、ならびに児童たちに厚く御礼申し上げます。また、拙稿を丁寧に精読してくださり、大変有益なご指摘をお寄せいただいた査読者の方々に感謝申し上げます。

文 献

- 秋田喜代美・斎藤兆史・藤江康彦・藤森千尋・榎木貴之・王林鋒・三瓶ゆき（2014）文法学習に関わる要因の教科横断的検討—文法課題遂行と有用感・好意度・学習方略間の関連—。東京大学大学院教育学研究科紀要, 53: 173-180.
- 中央教育審議会（2016）次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ（素案）のポイント。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/_icsFiles/afielddfile/2016/08/02/1375316_1_1.pdf, (2017年3月5日参照).
- 蛭谷みさ・田中博之（2015）小学校5年における学級力向上プロジェクトの開発と評価～教科横断的なカリキュラム編成を通して～。早稲田大学大学院教職研究科紀要, 7: 59-88.
- 橋本康弘・荒井紀子・伊禮三之・山本博文・香川喜一郎・奥山和彦・下池未紗・松田真依・市川薫・鎗木優佳・永井良次（2010）「教科横断型授業」の開発研究（I）—2008・2009年度協働実践研究プロジェクトでの取り組みから—。福井大学教育実践研究, 35: 67-78.
- 畑尻麻紀（2016）生徒の問いから始める教科横断型授業の試み：IB調査研究・SGH校の実践として。歴史と地理, 694: 16-26.
- 林則久（2003）教科横断的な学習に関するカリキュラム開発～小学校～。神奈川県立総合教育センター研究集録, 22: 89-92.
- 日景奈美・福岡雄二・田村光司・後藤健人（2004）主体的な学習活動を促す体育・保健体育科の授業改善—自己評価活動を生かした学習カード・ノートの活用を通して—。川崎市総合教育センター研究紀要, 18: 95-110.
- 井原淑雅（2016）「21世紀型能力」の育成過程における社会認識力の類型分析：高等学校での小論文指導による教科横断型カリキュラムの事例から。社会系教科教育学研究, 28: 121-130.
- 飯田和明（2005）各教科教育に関わる国語教育の領域と国語教材化に関する研究。全国大学国語教育学会発表要旨集, 109: 213-216.
- 稲川孝司・岡本真澄（2007）教育実践例 学ぶ意欲を高める教科横断型の問題解決学習。ICT-education, 35: 18-21.

- 片山七三雄 (2006) 英語論説文の作文教材をどのように作成すべきか—教科横断型教材作成に向けて. 教材学研究, 17 : 57-60.
- 川本治雄 (2000) 新学習指導要領と「総合的な学習」. 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 10 : 149-161.
- 小林一久 (1995) 体育授業の理論と方法. 大修館書店 : 東京, pp.84-85.
- 小宮昌志 (2016) 学習カード活用して主体的な学びを引き出す. 学研・教科の研究 保健体育ジャーナル, 108 : 1-4.
- 是枝喜代治 (2011) 身体活動は言語能力の発達を促す. 体育科教育, 59 (10) : 10-13.
- 工藤美波 (2015) 小学校体育科における学習カードの活用と検討. 山形大学大学院教育実践研究科年報, 6 : 218-221.
- 熊本県立高森高校 (2011) 英語・体育, 国語・日本史異教科連携の授業で生徒の意欲を喚起. ベネッセ教育情報サイト.
http://berd.benesse.jp/up_images/magazine/03shido_037.pdf (2017年3月7日参照).
- 鎌本一至・荒瀬仁志・安浦雅人・田原祐助・都甲潔・栗焼久夫 (2014) 教育用味覚センサの開発と教科横断型教材としての活用. 電気学会論文誌A (基礎・材料・共通部門誌), 134 (8) : 472-477.
- 教育出版株式会社編集局 (2011) ひろがる言葉 小学国語 5上. 教育出版株式会社 : 東京.
- 教育出版株式会社編集局 (2011) ひろがる言葉 小学国語 6上. 教育出版株式会社 : 東京.
- 松田真依・荒井紀子・伊禮三之・山本博文・橋本康弘・池島将司・行壽浩司・二丹田雄一・山田志穂・吉村祐美 (2011) 「教科横断型授業」の開発研究Ⅱ—2009・2010年度協働実践プロジェクトでの取り組みから—. 福井大学教育実践研究, 36 : 35-42.
- 三又英子・斉藤千映美・Echenique-Diaz Lazaro Miguel・由佐泰子・村松隆 (2010) 環境課題をテーマとした教科横断型紙芝居教材の開発とその活用法. 宮城教育大学環境教育研究紀要, 12 : 79-83.
- 文部科学省 (1998) 旧学習指導要領.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/. (2017年3月6日参照).
- 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/sougou.htm. (2017年5月10日参照).
- 文部科学省 (2011) 言語活動を充実させる指導と事例 (小学校体育).
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1300871.htm (2017年3月6日参照).
- 文部科学省 (2011) 言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】.
- 文部科学省 (2015a) 未来を見据えた初等中等教育改革.
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/jjkaigou/dai26/siryou4.pdf> (2017年3月5日参照).
- 文部科学省 (2015b) 教育課程企画特別部会論点整理「新しい学習指導要領等が目指す姿」.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1364316.htm (2017年3月5日参照).
- 森勇示 (2012) 体育科における「言語活動の充実」への懸念. 愛知教育大学保健体育講座研究紀要, 37 : 7-13.
- 中村利之・田島行夫・廣橋義敬 (1995) 体育授業における学習カードの活用に関する研究. 千葉大学教育学部研究紀要, 43Ⅲ自然科学編 : 43-55.
- 二五義博 (2013) 算数の計算を活用した教科横断型の英語指導 : 小学校高学年児童を対象とした英語の数の学習を事例として. 小学校英語教育学会学会誌, 13 : 84-99.
- 新田秀樹 (2008) 「五感アトラボ」の構想と課題 : 教員養成教育のための教科横断型表現教育カリキュラムの開発. 宮城教育大学紀要, 43 : 113-119.
- 諾日布斯仁 (2008) 体育授業におけるPISA型「読解力」の育成に関する検討. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 57 : 317-323.
- OECD, 国立教育政策研究所監訳 (2004) PISA2003年調査評価の仕組み. ぎょうせい : 東京, pp. 7-8.
- 岡出美則 (1994) 1. 「わかる・できる」学習の意義. 高橋健夫ほか編, 体育の授業を創る. 大修館書店 : 東京, pp.128-142.
- 佐藤学 (2011) 体育授業における言葉の学び. 体育科教育, 59 (10) : 9.
- 高橋建夫 (2011) 体育における「言語活動の充実」の展開方向. 体育科教育, 59 (10) : 14-18.
- 竹内久代 (2014) 教科横断型授業を通して生徒の考える力とコミュニケーション力を育てる : 身近な生活から世界の環境問題を考える. 日本私学教育研究所紀要, 50 : 69-72.
- 山口孝治 (2014) 運動の得意な子と苦手な子の言語的相互作用の内実. 体育科教育, 62 (6) : 14-17.

{平成27年3月22日 受付}
{平成27年8月17日 受理}